瓜子姫子

楠山正雄

一

　むかし、むかし、おじいさんとおばあさんがありました。ある日おじいさんは山へしば刈（か）りに行きました。おばあさんは川へ洗濯（せんたく）に行きました。おばあさんが川でぼちゃぼちゃ洗濯（せんたく）をしていますと、向（む）こうから大きな瓜（うり）が一つ、ぽっかり、ぽっかり、流（なが）れて来（き）ました。

おばあさんはそれを見（み）て、

「おやおや、まあ。めずらしい大きな瓜（うり）だこと、さぞおいしいでしょう。うちへ持（も）って帰（かえ）って、おじいさんと二人（ふたり）で食（た）べましょう。」

といいいい、つえの先で瓜をかき寄せて、拾い上げて、うちへ持って帰りました。

夕方になると、おじいさんはいつものとおり、しばをしょって山から帰って来ました。おばあさんはにこにこしながら出迎えて、

「おやおや、おじいさん、お帰りかえ。きょうはおじいさんのお好きな、いいものを川で拾って来ましたから、おじいさんと二人で食べましょうと思って、さっきから待っていたのですよ。」

といって、拾って来た瓜を出して見せました。

「ほう、ほう、これはめずらしい大きな瓜だ。さぞお

いしいだろう。早(はや)く食(た)べたいなあ。」

と、おじいさんはいいました。

そこでおばあさんは、台所(だいどころ)から庖丁(ほうちょう)を持(も)って来(き)て、瓜(うり)を二つに割(わ)ろうとしますと、瓜(うり)はひとりでに中からぽんと割(わ)れて、かわいらしい女の子がとび出(だ)しました。

「おやおや、まあ」

といったまま、おじいさんもおばあさんも、びっくりして腰(こし)を抜(ぬ)かしてしまいました。しばらくしておじいさんが、

「これはきっと、わたしたちに子供(こども)の無(な)いのをかわいそうに思(おも)って、神(かみ)さまがさずけて下(くだ)さったものにちが

いない。だいじに育ててやりましょう。」

「そうですとも。ごらんなさい。まあ、かわいらしい顔をして、にこにこ笑っていますよ。」

と、おばあさんはいいました。

そこでおじいさんとおばあさんは、あわててお湯をわかして、赤ちゃんにお湯をつかわせて、温い着物の中にくるんで、かわいがって育てました。瓜の中から生まれてきた子だからというので、瓜子姫子という名前をつけました。

瓜子姫子は、いつまでもかわいらしい小さな女の子でした。でも機を織ることが大すきで、かわいらしい

機（はた）をおじいさんにこしらえてもらって、毎日（まいにち）、毎日（まいにち）、とんからりこ、とんからりこ、ぎいぎいばったん、ぎいばったん、機（はた）を織（お）っていました。おじいさんはいつものとおり、山へしば刈（か）りに出（で）かけます。おばあさんは川へ洗濯（せんたく）に出（で）かけます。瓜子姫子（うりこひめこ）はあとに一人（ひとり）、おとなしくお留守番（るすばん）をして、あいかわらず、とんからりこ、とんからりこ、ぎいぎいばったん、機（はた）を織（お）っていました。

　おじいさんとおばあさんは、いつも出（で）がけに瓜子姫子（うりこひめこ）に向（む）かって、

「この山の上には、あまんじゃくというわるものが住（す）

んでいる。留守にお前をとりに来るかも知れないから、けっして戸をあけてはいけないよ。」

といって、しっかり戸をしめて出て行きました。

二

するとある日のこと、瓜子姫子が一人で、とんからりこ、とんからりこ、ぎいぎいばったん、機を織っておりますと、とうとうあまんじゃくがやって来ました。そしてやさしい猫なで声をつくって、

「もしもし、瓜子姫子、この戸をあけておくれな。

二人で仲よく遊ぼうよ。」
　といいました。
「いいえ、あけられません。」
と、瓜子姫子はいいました。
「瓜子姫子、少しでいいからあけておくれ、指の入るだけあけておくれ。」
「そんなら、それだけあけましょう。」
「もう少しあけておくれ、瓜子姫子。せめてこの手が入るだけ。」
「そんなら、それだけあけましょう。」
「瓜子姫子、もう少しだ。あけておくれ。せめて頭

の入るだけ。」

しかたがないので、瓜子姫子は頭の入るだけあけてやりますと、あまんじゃくはするするとうちの中へ入って来ました。

「瓜子姫子、裏の山へ柿を取りに行こうか。」

と、あまんじゃくがいいました。

「柿を取りに行くのはいや。おじいさんにしかられるから。」

と、瓜子姫子がいいました。

するとあまんじゃくが、こわい目をして瓜子姫子をにらめつけました。瓜子姫子はこわくなって、しかた

なしに裏の山までついて行きました。

裏の山へ行くと、あまんじゃくはするすると柿の木によじ登って、真っ赤になった柿を、おいしそうに取っては食べ、取っては食べしました。そして下にいる瓜子姫子には、種や、へたばかり投げつけて、一つも落としてはくれません。瓜子姫子はうらやましくなって、

「わたしにも一つ下さい。」

といいますと、あまんじゃくは、

「お前も上がって、取って食べるがいい。」

といいながら、下へおりて来て、こんどは代わりに

瓜子姫子を木の上にのせました。のせるときに、

「そんな着物を着て登るとよごれるから。」

といって、自分の着物ととりかえて着かえさせました。

瓜子姫子がやっと柿の木に登って柿を取ろうとしますと、あまんじゃくは、どこから取って来たか、藤づるを持って来て、瓜子姫子を柿の木にしばりつけてしまいました。そして自分は瓜子姫子の着物を着て、瓜子姫子に化けて、うちの中に入って、すました顔をして、またとんからりこ、とんからりこ、ぎいぎいばったん、機を織っていました。

三

しばらくすると、おじいさんとおばあさんは帰(かえ)って来(き)ましたが、なんにも知(し)らないものですから、

「瓜子姫子(うりこひめこ)、よくお留守番(るすばん)をしていたね。さぞさびしかったろう。」

といって、頭(あたま)をさすってやりますと、あまんじゃくは、

「ああ、ああ。」

といいながら、舌(した)をそっと出(だ)しました。

するとおもての方が、急にがやがやそうぞうしくなって、りっぱななりをしたお侍が大ぜい、ぴかぴかぬり立てた、きれいなおかごをかついでやって来て、おじいさんとおばあさんのうちの前にとまりました。おじいさんとおばあさんは、何事がはじまったのかと思って、びくびくしていますと、お侍はその時、おじいさんとおばあさんに向かって、

「お前の娘は大そう美しい織物を織るという評判だ。お城の殿さまと奥方が、お前の娘の機を織るところが見たいという仰せだから、このかごに乗って来てもらいたい。」

といいました。

おじいさんとおばあさんは大そうよろこんで、瓜子姫子に化けたあまんじゃくをおかごに乗せました。

お侍たちがあまんじゃくを乗せて、裏の山を通りかかりますと、柿の木の上で、

「ああん、ああん、瓜子姫子の乗るかごに、あまんじゃくが乗って行く。瓜子姫子の乗るかごに、あまんじゃくが乗って行く。」

という声がしました。

「おや、へんだ。」

と思って、そばへ寄ってみますと、かわいそうに

瓜子姫子は、あまんじゃくのきたない着物を着せられて、木の上にしばりつけられていました。おじいさんは瓜子姫子を見つけると、急いで行って、木から下ろしてやりました。お侍たちも大そうおこって、あまんじゃくをおかごから引きずり出して、その代わり瓜子姫子を乗せてお城に連れて行きました。そしてあまんじゃくの首を斬り落として、畑の隅に捨てました。その首から流れ出した血が、きび殻にそまって、きびの色がその時から赤くなり出しました。

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社
　　１９８３（昭和58）年４月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：土屋隆
２００６年9月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。